

< 第16回学会大会講演 >

## 北米におけるレジャー・レクリエーションの動向

Dr.コー・ウェストランド

世界レジャー・レクリエーション協会副会長兼事務局長

訳 原田宗彦・山口泰雄（鹿屋体育大学）

本日は貴学会にお招き戴きまして有難うございます。そして、色々なものを見聞させて戴いたことを非常に嬉しく思っております。残念ながら私は日本語で論文を発表することができませんので、しばらくの間ご辛抱を願いたいと思います。

さて、本日は、北米におけるレクリエーション教育の変遷および傾向について述べたいと思います。教育制度は社会の要求に対応して発達してきました。時に教育制度の変化は反動的である場合もありますが、社会は非常に複雑であるために、ゆっくりと変化していくものです。もし、教育制度の中での変化、あるいは制度自体の変遷を理解しようとするならば、わたしたちはその社会の様子をまず明らかにしていかなければなりません。今日は北米の場合について考えてゆきたいと思います。本論文ではまず最初に歴史的なコンテキストからカナダやアメリカにおける教育制度の現状を紹介し、次に、それらの社会の変化に対応したレクリエーション教育を考え、最後に、レクリエーション教育が将来どのように変化していくのか、その方向性を探っていきたいと思います。

レクリエーションの源流はもともとは非常に実践的で（pragmatic）現場に即したものでありました。最初、アメリカでは、地域におけるプレイグラウンド（遊び場）のリーダーを、社会が必要としました。その後プレイグラウンド運動が拡大し、広い知識や経験、教育を備えたリーダーがその後必要となってきました。

そのような動きに対して、いろいろなトレーニングコース（指導者養成コース）ができましたが、リーダーを育てる教育課程は、YMCA等に代表される、民間団

体の手に委ねられるようになりました。YMCAによるリーダー・トレーニングは大きな広がりを見せ、YMCAはシカゴ、モントリオール、そしてマサチューセッツ州スプリングフィールドに大学をつくりました。

起源について考えることは非常に重要なことで、これによってなぜレクリエーション教育が大学の体育学部の中に存在するのが明らかになるわけです。そしてなぜ多くの人々の心の中に、特に子供の心の中にレクリエーションイコール楽しみ、あるいはゲームという図式が作り上げられていくのが理解できるでしょう。

指導者に対する需要が非常に高まってきた結果、大学においていわゆるリーダーシップトレーニング（リーダーシップの教育）が実施されたわけですが、第2次世界大戦前にレクリエーション管理の理論をやっていたのは、ミネソタ大学ただ1校でしかなかったのです。このような傾向は1960年代まで続きました。これは北米社会の社会・経済的状況を反映しているわけです。

脱工業化社会（post industrial society）の到来により労働時間が短縮され、経済的余裕が得られたために、異なった余暇に対する態度を人々が持ち始めるようになりました。これは、すべて第2次世界大戦前の1930年代、大恐慌に端を発する一連の経緯の結果であったわけです。人間、特にアメリカ人は、その時から生産者から消費者へと変わりました。人々はサービスを購入するだけの余裕とお金を持つようになり、増大する需要を満たすためのレクリエーションリーダー

に対するトレーニングが各教育機関に要求されました。この様な傾向は1960年代末まで続くわけです。

カナダはアメリカの状況より10年遅れてそれに続きました。レクリエーションとレジャー・サービスの学位を授与する大学は全米で350校あり、これに加えて2年制の、リーダーシップを強調した短期大学(コミュニティカレッジ)が90校アメリカにあります。カナダでは総合大学が23校、短期大学が45校あり、同じようにリーダーシップを強調したプログラムを提供しています。

ここで強調したい大事なことは、このような傾向は北米に生れて北米で展開された独自の現象であるという点です。他の国々においては、これとは異なった発展を遂げているわけです。ヨーロッパにおいては、脱工業化社会の到来が少し遅れ、レジャーやレクリエーションに関する研究は、北米の場合とはかなり異なった基盤の上に発展しました。

ヨーロッパにおけるレクリエーション・リーダーに対する需要はさほどではなく、レジャー、レクリエーションではデュマズディエ、フラスティエ、ラロップといった社会学者たちの間でレジャーやレクリエーションに対する関心が高まってきました。ここでレジャー社会学が生れ、レクリエーション教育はアメリカとは異なる発展を遂げたのです。このように北米で生れたレジャーやレクリエーション教育のひとつのモデルは、決してそれ以外の国々に輸出できるものではなく、長所と短所を併せ持つものであります。

では、様々な教科あるいはコースの内容はどうか。いろいろ異なるコースについては後程説明しますが、カナダやアメリカの状況に対応し得る非常に基本的なモデルがそこには存在するわけです。

カリキュラムは次のような目的をもっています。まず最初の目的は、異なる文化的背景をもった生徒たちに対して、人文、社会、自然科学を基本とした教育を行ないます。その教科は次のようなものです。

- ・レクリエーション教育
- ・発育と発達
- ・成人教育
- ・コミュニティ論
- ・建築

このように生徒はまず、レクリエーション教育に関

連した教科を勉強します。また、次のような関連領域を学ぶわけです。すなわち、歴史、哲学、レジャー・レクリエーション理論、施設管理、施設運営、プログラム等の近年特に増加してきた専門領域についてです。

一般的に大学は次のような4つの選択科目を強調した専門科目があります。

第1番目がプログラム・プランニング(プログラム計画)で、

第2番目が管理、第3番目がセラピューティックレクリエーション(治療的療養的レクリエーション)、第4番目が野外レクリエーションです。

プログラム・プランニングでは学生はレクリエーション活動の特質と個人と社会福祉について学習します。そして、リーダーシップ、プログラム計画、都市レジャー・システムとプレイ理論を勉強します。

管理を専攻している学生は管理理論、レジャー・サービスを効果的に供給するための方法と手続についての知識を理解するわけです。これは、運営、組織、政府、財政、人事、公共レクリエーションといった科目を含んでいます。

セラピューティック・レクリエーション専攻の学生は、身体的、精神的、情緒的な障害を持つ人々にたいし、どのようなレクリエーション活動を提供するかを学ぶ機会が与えられています。彼らはレジャー・カウンセリング、ジェントロジー(老年学)、身体障害、情緒障害、そして知恵遅れの子供たちのためのレクリエーションを学びます。

近年非常に重要になってきたもうひとつの領域には、ダグラス・セサムズが「アウトサイダー」と呼ぶ、社会によって社会の本流から外され、阻害され、社会の片隅へと追いやられた人達のためのレクリエーションがあります。このような人々は自分たちだけの規範と価値を持って下位文化を形成し、逸脱的行動を取る以外自分の生き方を認めてもらう手立てのない人々の集団なのです。これは我々の社会の若い人達、あるいは少数民族あるいは宗教における少数派といった人達によく見られます。

野外レクリエーション専攻の学生は、野外でレクリエーション活動ができる技術を学ぶわけです。この学生達はキャンピング、野外教育、公園管理、土地利用、造園学、そして森林レクリエーションといった科目を

勉強します。

先程私が述べましたようにカナダにおけるレクリエーション教育は一般的にアメリカと同じようなパターンをとっています。学部レベルでは実技コース (skill course) あるいは実習の経験にやや重点が置かれているといった傾向があります。

コミュニティ・カレッジ (カナダでは短期大学のかわりにコミュニティ・カレッジというのがあります。) ここではもっと実践的な仕事、即ちスケート場アリーナのマネージャーとかあるいはプールの管理人といった職につくためのトレーニングが行われています。しかしながら、コミュニティ・カレッジを卒業後、大学レベルで続けてレクリエーション教育のコースを専攻することもできるようになっています。

学部レベルでは一般的に4年間かかりますが、コミュニティ・カレッジでは2年間のコースを提供しています。

ここで皆様に少しPRさせて頂きたいのですが、一冊の本を紹介させて頂きたいと思います。この本はここに一緒にきておりますマックス・ダモア氏が中心になって書かれた本です。この本には今私が話しているような内容だけではなくて、世界中のレジャー・レクリエーション教育に関する情報が集められています。この本ではそれぞれの国の教育に関する方針、教育哲学に関する内容、あるいは各大学において様々なレクリエーション・コースが設けられています。それらのカリキュラムの内容等が詳しく述べられています。皆様にぜひこのコピーをお求めになることをお進めします。

さて、この様な社会変化の影響を受けて大学におけるレクリエーション教育は非常に学際的な側面を持つように変化してきたのです。多くのレクリエーション教育のコースあるいは関連分野である社会科学や公園サービス、森林プログラム、カリキュラム運営、そういった他のコースとしても専攻することができ、関連が強いのです。もうひとつの特徴はレクリエーションとレジャー研究 (Recreation and Leisure Studies) といった学科が作られましたが、ここではリーダーシップ・トレーニングということはあまり強調されなくなり、むしろ、レクリエーション現象の学問的側面に関する関心が非常に高まってきたのです。

こういった傾向はカナダ、ケベック州のケベック大学トロイ校において、数年前、レジャー・サイエンス学科 (余暇科学学科) が設置されたということでも明らかです。友人であるマックス・ダモア氏はこの学科の中心的な人物です。学科のことに關してはもっと詳しいことをお聞きすることができるのではないかと思います。

もうひとつの顕著な変化は、レジャー・カウンセリングとかレジャー教育といったものが非常に強調されてきたということです。これは個人が自分自身のレクリエーションについて大いに責任を持つようになってきたという事実に、あるいは人々が自分達の生活におけるレクリエーションとかレジャーの重要性を認識するようになってきた事実に基づいています。このことは、脱工業化社会によって説明されるレクリエーションに対するニーズというものが終りを遂げ、すでに消費者の態度とか消費者の行動によって様々なサービスというものが必要となってきたというような状況に影響されているわけであります。こういった事実は北米社会におきましてちょうど脱工業化社会から、いわゆる情報化社会 (information society) に移行する時期に北米社会が直面しているという事実によってこの現象がもたらされたと思います。

こういった情報化社会への移行によって、我々の伝統的な生活における労働への態度というものが変化してきました。

今日、我々にとって重要なテーマは、個人主義志向の高まりではないかと思います。このことは自己中心主義 (me first) ではなく自分自身の持っている能力に対しての信頼性、こういったものの高まりを意味しています。そして様々な組織とか機会の統制から離れていく傾向にあるということの意味するわけです。すなわち、個人は自分の生活に責任を持つと言う意味なのです。健康管理はこのひとつの良き例ではないかと思えます。たとえば、医療制度そのものが人々の健康に責任を持たなければならないということを理解するようになる訳です。

最近、社会におきまして多く見られる例は、人々は自分の体調に非常に注意するようになり、また、健康状態に多大なる関心を示し、そして、健康管理というものは、患者と医者による協調的、協力的な営みの総

計だということを認識するようになってきたからです。

このことは、まさにレクリエーションについてもあてはまるのです。人々は自分達自身が最も素晴らしいレクリエーション資源であるということを認識するようになりました。そして、自分たちは、自分たちのレクリエーションに関して責任があるという風に考える訳です。そして政府は国民を楽しませたり、あるいは統制したりといった責任は持たないものであるということです。この結果は、これまでのレジャー・レクリエーション提供者 (provider) というものが急速にカウンセラーとかイネーブラー (enabler) と呼ばれるようになってきました。こういった人達は、個人が自らの能力を開発したり、また、新しい興味を喚起するのに役に立つ人々であります。

もうひとつの重要な傾向は、様々な分野に関して統合 (integration) への動きが見られることです。工業化社会では、我々は科学の領域というものを非常に専門化あるいは細分化してきた訳です。結局、生活のすべての領域に科学が関わるという風潮が浸透していきました。我々が理解しなければならないのは、現在とは反対の方向へも進まなければならないという点です。このことは我々レクリエーション専門化にとっても重要な意味を持っています。多くの専門家は、ある意味においてレクリエーション・リーダーであるという認識を持たなければならないということです。たとえば医者ですが、これは患者に運動処方をするすし、建築家は建築の際にレクリエーションの空間を作るわけですし、それから土地の設計士 (landscape architect) といったものは、公園とかそういったものを開発しているわけです。ですからかれらはある意味においてすべてレクリエーション・リーダーである訳です。それゆえに、そういった専門家たちは、彼等の専門領域における機関においてレクリエーションに関する準備もすべきであります。

数週間前のことですが、イスラエルの医学部の学生は30時間以上レクリエーションに関するコースを必修でとらなければならないということを知り、非常に興味深く思いました。このことは近い将来、北米のレクリエーション教育には、現在とは完全に異なったアプローチが出現するのではないかとということが示唆され

るのです。ですから、すべての領域の専門家がレクリエーションに関わってくるということでしたが、現在の様々なコース、先程私が示した4つのコースですが、こういったものを持ち続けるということは、過去の遺物というのではなくて、まさに前世紀の遺物のようにになってしまうのではないかとというような懸念が有るわけですね。

もし、大学院レベルにおいてレクリエーション・コースの専攻を制限するという方向に進むよりは、私が思うには、すべての分野あるいは様々な研究・教育分野を専攻している学生たちが専攻できるようなコースにしてはどうかと思うわけです。

このことに関しておもしろい事例を紹介します。ベルギーのブリュッセルにあるフリーユニバーシティ、こういったところでは大学院レベルで様々なところからレクリエーション教育を専攻できるような制度になっています。

オランダのトゥイバーク大学 (The University in Tilburg) で先週知ったことですが、新しい大学院のコースであるフリータイム・サイエンス・・・自由時間に関する科学・・・こういったコースが今年の秋にスタートしたということです。

私にとって興味があるのはこういった国々では、学校制度においてはレクリエーション教育は必要であるけれども、大学においてはレクリエーション教育というものはあまり要求がないということです。

もうひとつの重要な最近の傾向は、財政的な保守主義の現われではないかと思えます。このことはレクリエーション学科にとりまして、将来、少ない予算で数多くの事をしていかななければならないということの意味する訳です。このことは私が先程話しましたように政府は余暇やレクリエーションの提供者ではなく、個人が自分自身の提供者でなければならない、そして政府は単に援助的な役割しか持たないものであるということでもあります。

すでに、カナダの地域社会ではこういったことが現実のものとなってきています。その傾向がどのようなものであるかということ、参加者の組織への関わりという点で voluntary involvement, すなわち参加者の自発的参与、自発的参加といった形態が増えてきています。

最後に皆様にぜひお話ししたいことは、ある意味においてレジャー教育、レクリエーション教育というのがひとつのサイクルを迎えたのではないかという点です。つまり、今、工業化社会の以前の段階に戻ってきているのではないかということです。そして異なったレベルではありますが、世界的な傾向として自発的参与のレベルに変化してきているのではないかということです。

私が話した事が皆様にとって有益なものとなることを信じております。御静聴ありがとうございました。